

# 禅の友

Zen no Tomo

# 2

February 2025





# ご本山だより 大本山永平寺【春の上山】

大本山永平寺  
福井県吉田郡

☎〇七七六・六三・三一〇二

二月中旬から三月末までの間、新しい修行僧が上山をします。

安下処である地藏院で綱代笠をかぶり、草鞋を履き、身支度を調べ、先輩和尚さんに先導されながら一列になって山門まで歩いて行きます。到着すると山門の脇に掛けてある木版という分厚い木の板を、撞木を用いて一人三回ずつ強く叩きます。その音を聞いて客行和尚という先輩和尚が山門までやってきます。そして、一人ひとりに修行に対する覚悟を問うのです。何度も問答を繰り返しようやく入門が許され、山門で五体投地の礼拝をし山内が上がつていきます。

筆者が上山したのは二十年ほど前ですが、いまでもその時の様子をはつきりと覚えています。地藏院を出発してからしばらくの間、前を行く仲間の足元を見ながら歩いていました。流れのはやい川の音と雪を踏みしめる音

だけが聞こえていました。しばらくして頭をあげると、樹齢五〇〇年という杉の大木の並木の奥に、山門がそびえているのが見えました。近づくほどその荘厳さに圧倒され、「いよいよ始まるのだな」と覚悟を決めざるを得ませんでした。客行和尚の問いに必死に答え入門が許された時、歩き出そうとしても寒さで冷え切った足がうまく動かず、草鞋を脱ごうにも指が悴んで紐がほどけなかったことも思い出します。上山をする修行僧の姿を見るたびに、自分もあのようにして始まったのだなと感じ入ります。

上山をすると衣食住全てが変わります。どれだけ社会経験が豊富で、仏教の教えを知っていても、上山をするとはそれは全く関係がなくなり、彼らはこれから、今までのことをすべて手放し、仏の家に自らを投げ入れていくのです。





# ご本山だより 大本山總持寺【節分と涅槃会】

大本山總持寺  
神奈川県横浜市  
☎〇四五・五八一・六〇二二



節分とは季節の節目をいいます。

「立春、立夏、立秋、立冬の前日」  
のことを指し、一年に四回あります。

旧暦では春から新年が始まるため、  
立春の前日の節分（二月三日ごろ）は  
大晦日に相当する大切な日でした。

そのため立春の前日の節分が重要  
視され、節分と言えばこの日を指すよ  
うになったのです。

昔、季節の分かれ目には邪気が入り  
やすいと考えられ、様々な邪気祓いの  
行事が行われてきました。これを「追  
儼な」と言います。おなじみの豆まきも  
新年を迎えるための邪鬼祓いの行事  
なのです。

總持寺では二月三日（月）にこの節

分追儼式を福男、福女、著名人をお迎  
えし盛大に行います。

また二月十五日はお釈迦さまのご  
命日である「釈尊涅槃会」があります。  
ある地方ではこの時期に降る雪を「涅  
槃雪はんゆき」と呼んでいるそうです。

ねはんゆき ほとけのこころ

あたたかし

大きな涅槃図を掲げて色とりどりの  
涅槃団子をお供え致し、禅師さまの  
御親修で法要が執り行われます。

この行持ぎょうぢが終わると修行僧は一定  
の節目をつけそれぞれの道に進み、ま  
た入れ替わるように新しい修行僧が  
道を求めて上山してくるのです。

選・坊城俊樹

煤逃すすげて有馬記念のパドツクに

宮城県 金升 富美子

評 これはまた愉快。「煤逃すすげ」という季題は年末に掃除をさぼりたい男が外出してしまうこと。選りにも選って有馬記念の競馬場のパドツクまで行つたという。主婦の皆さまは呆れて物も言えないだろうが、一読して何々大笑してしまつた。

嘘見抜く力なけれど蜜柑剥く

埼玉県 野原 孝子

評 今回はなんだか前の句と連作みたいになつてしまつたが、これもまた男たちの無責任さが暴かれていて面白い。というか恐ろしい。奥さまはご主人が何か隠しているのは分かっているのだが嘘おそにも出さない。黙って蜜柑を剥いている。ああ恐ろしい。

◆ 列島に宇宙の微塵星流る

北海道 中西千晶

◆ 無造作なだに鉋なで繩断ち冬構

岐阜県 大下雅子

◆ 野兔の光点となる枯野かな

鳥取県 眞山博充

◆ 古書店にモンロー嬌笑暮の秋

千葉県 長澤さよみ

◆ 解約の姉の通帳秋の雨

静岡県 末光愛正

◆ 引売ひきうり女与謝の松茸橋立で

山口県 栗屋邦夫

◆ 熱爛ねつらんにいづも訛の間延びして

島根県 藤江 堯

◆ 襟を抜く棧敷の女帰り花

大阪府 岡 恭介

◆ 点滴の雫や能登に雷雨来る

千葉県 甲斐 勇

◆ 突きあぐる地震にこたつの足つかむ

岩手県 阿部 照子

選者吟

墓に彫る薔薇はおそらく冬薔薇

俊樹

作句小見

これは青山墓地の外国人墓地で出会った外国の方の墓の様子。女性らしく美しい薔薇の彫刻があった。死しても絢爛たる薔薇に囲まれたそれをただ呆然とみていた私。明治あたりに日本に来て、そして祖国に戻らずここで亡くなったのだろう。

選・長澤ちづ

ねぎの種を蒔かむとつまむ指の先 種と  
はほんに小さきものよ

静岡県 杉原 民子

評  
ねぎの種は他の野菜の種の中でもことに小さいらしい。こんな小さな中に野菜の命の源があるのかと、作者は心からおどろき愛おしむ様子が措辞から伝わってくる。

雲きれて青空ひろがるひと所を白鷺の群  
れ光りつつゆく

鳥取県 徳本 義則

評  
「ひと所を」と限定したところが良かった。雲の白と、空の青と、白鷺の放つ光とコントラストが効いている。地上に居る作者の眼差しが捉えた大らかな一首である。

◆ リユツク魚ひ坂道上る老爺の背に過疎を生き抜く覚悟を見たり

埼玉県 新井 巳喜雄

◆ 何時の日も笑みを絶やさぬ母なりきキビの豊作母に捧げる

長野県 山崎 さと子

◆ 戦時中に物々交換したという母の形見の鬘甲の櫛

埼玉県 白藤 巳玲

◆ 天逝の子のアパートの窓に見しからすうりの実の赤きを忘れじ

広島県 徳永 進一郎

◆ 出羽富士に初冠雪の便りあり除雪の支度心身の支度

秋田県 高橋 カツ子

◆ 大津波に浸りし庭の片隅に万年青の生きて朱き実重ぬ

岩手県 阿部 照子

◆ 他人には自制はたらく介護職親父になると駄目だと息子

静岡県 末光 愛正

◆ 柿色で四本取りの蒲団とじ母の針箱に興味しんしん

秋田県 小松 紀子

◆ 親真似てうしろに並ぶ二匹蜘蛛はなれてはぐれ明日はいはずへ

静岡県 内山 忍

◆ 名を持つも持たざる草もひとしなみ枯野となりて風を隠らす

大阪府 柏原 才子

選者誌

母とわれと雨の日は好きで雨の日の秋海棠の茎の

あかさよ

ちづ

作歌小見

山崎さん、白藤さん、小松さんの母を偲ぶ歌に心惹かれました。収穫されたキビ、鬘甲の櫛、針箱といった具体が鮮やかに目に浮かび、それぞれの母上の佇まいを髪髻とさせています。